

もくじ

千住四丁目 氷川神社山車のひみつ… P1

光茶釜と二代目市川團十郎… P3



10月14日から2日間に渡った山車の組み上げ



足立史談

第693号

2025年11月15日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集局

〒120-0001

東京都足立区大谷田 5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

千住四丁目 氷川神社山車のひみつ

郷土博物館

■江戸型山車 1月11日まで開催中の文化遺産調査特別展「千住宿400年」では、12年ぶりに足立区指定民俗文化財である千住四丁目の氷川神社の山車を組み上げ展示しています。山車の正面に掲げられた扁額の裏面には「干時明治十有六年九月中浣調整之 千住驛第四街氏子中」と墨書されています。この記述から、明治16年（一八八三）は、氏子たちが「調整」を行った時期で、山車の造立はさらに古いものと推察されています。

*中浣（ちゅうかん、中旬・11日から20日までの間のこと）

さて、この山車は「江戸型山車」とよばれる江戸の山王祭、神田祭に曳きまわされていた山車の形式で造られたものです。江戸型山車のなかでも、鉾台といわれる四角形の枠を飾り幕で覆って台車にのせる形式で、外見的には台車の上に二つの箱を重ね、さらにその上に人形を置いた塔のような形に見えます。元来は二輪車で牛が引いていましたが、人が曳くようになり四輪になりました。

郷土博物館で展示している山車は、博物館開館の際に、展示用に制作した飾りの台車のため、車輪が動くことはありません。

■鉾台型のからくり 山王祭、

神田祭の山車は、当初シンプルなものでしたが、年代が進むにつれて競うように装飾され、高く目立つように作られるようになります。町内の巡行の際には問題はないのですが、將軍上覧のため、江戸城の門をくぐる際には、その高さが障害となりました。

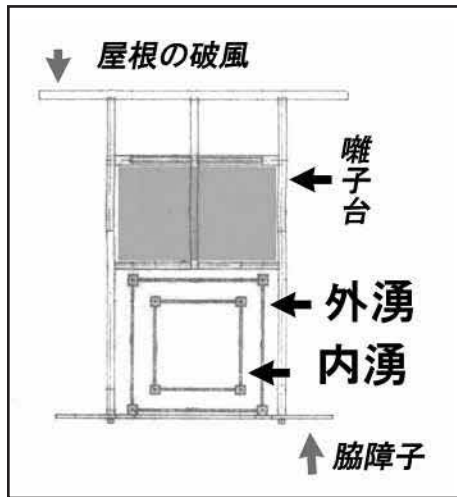
高い柱の上に装飾や人形のある一本柱万度型といわれる形式の山車では、城門をくぐる際には、鉾柱を後ろに倒して高さを下げるように工夫されました。

さらに高欄や四方幕の装飾をつけた山車が主流になると、三層せり出しによる高さの調整ができる山車が作られるようになります。これが鉾台型の山車です。

山車の象徴となる人形の乗る層（三層目）と、装飾性の高い四方幕で飾られた二層の枠が、一層目の枠のなかに入れ子式に収まり、上下に出し入れできるようからくりが生まれました。

■からくりの仕組み 四方幕で覆われているため、どういう仕組みなのかは、なかなかわかりません。今回、組み上げの際に写真撮影しましたので、このからくりについて、ご紹介します。

■枠を基本としたづくり 三層の台が上下する仕掛けの元は、枠にあります。



【図1】背面、真上から見た山車の骨組み
(内湧の中心には、人形竿用の柱が別に立ちます)



【写真1】「外湧 向テ 左上」と墨書。
組み上げの際に、部材の使用位置を示したものの。

山車の組み上げのために、部材に墨書された番付には、「外湧」、「内湧」(そとわく、うちわく)と書かれています。【写真1参照】、一層目の部分になる柱が台座に立てられ枠組みがつくられます。【図

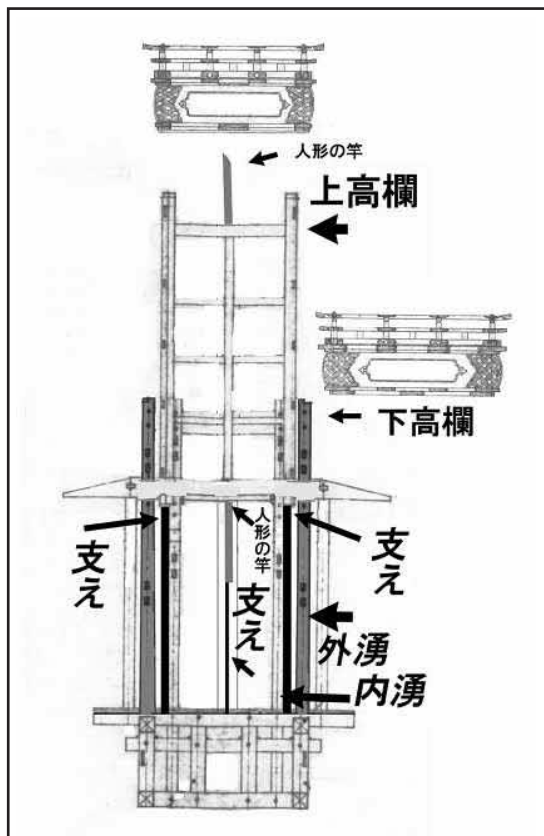
そして、この内湧の外側に添う形で上高欄の台にもなる可動式の枠がはめ込まれています。この枠を上上げて、枠の下四隅に木材を支え(つかえ棒)として入れて高さを固定します。

人形を固定する柱も同様のつくりです。内湧の中心に、溝を彫った柱が立てられます。この柱の内側に、やはり溝を作った長い竿を差し込みます。

竿の先は、長刀型になっており、上に据える人形の足の間にしっかりと入るようになっていきます。柱の溝に添って、竿も上下することができ、竿の高さを固定するには同様に、柱の溝に支えとなる木材を下からあてがいます。

【図2】

■ 枠の上げ下げ 下高欄は、外湧の上部に付けられ、上高欄は、



【図2】山車の高さを変える構造(背面図)
* 人形の高さを変える竿と竿の支えは台の前面側にあるが(次頁【写真3】参照)、図面の関係上背面図に書入れている。

もともとは、江戸城の城門をくぐるために考えられたという仕組みですが、巡行時になるべく高く立派に見せることができ、山車倉などに収納するときにはコンパクトにまとまりやすいことなどが、人々には利点として好まれたと想像されます。

可動する枠の上部に取り付けられます。三層目と二層目が、可動枠によって構成されていることになります。可動枠の上げ下げのために、小さな滑車が内湧の中側の上部、山車の前後二カ所に取り付けられています。

上高欄は、そのなかには入らない大きさなので、そのままで下げることができないのは下高欄のところまでになります。(下高欄と上高欄が繋がるところまで) 外湧と内湧には間が空いているため、四方幕をつけたまま下げることは可能でしょう。

人形を支えている竿も、同じように上下できますが、実は上高欄に隠れて、人形の足置きとなる板が渡してあることや人形の衣装や腕を広げたポーズで、広がっているため、人形をつけたまま竿を上下させることは現実的ではないかもしれません。

竿の高さは、それぞれ二メートル四〇センチほどで、高欄をとりはずせば、一層目となる外湧、内湧のなかに、二層目、三層目を構成する可動枠がすっぽりと入るつくりになります。



【写真3】可動枠を支える仕組みと、床下に固定された枠を吊り上げる綱。(山車正面側からの撮影)



【写真2】内湧につけられた滑車を通した細綱が可動枠の下部に結ばれている。

■山車の組み上げ 山車の組み上げ作業は、千住四丁目で普段神社の仕事を請け負っており氏子である荒井工務店にお願いしました。昭和六十一年（一九八六）に組み上げた際には、荒井棟梁は全くの初めてでしたが、「お前の親父が組み上げたんだから、お前はできるだろう」と町の人に言われたそうです。主だった部材には番付があり、職人たちの経験と技、仕事慣れしたまとまりのある働きにより、バラバラだった部材も順調に組みあがりました。また、前

回肝心なところを写真で残してあり、四方幕の取り付け方や、静御前の身支度などを確認できたことも円滑に進んだ理由のひとつです。現在は、建設作業用につくられた足場を組んでの作業が可能で、スピードアップの要因となっています。今回は、博物館の階段寄りに組み上げたので、階段から人形の受け渡しができ、より安全に作業ができました。

■伝承される技術 定期的に組み上げと解体を行うことによって、伝統的な木組による山車の組み上げ技術は伝承されていきます。

祭礼で使われる道具は、実は人々の手で使われることもその保存には必要で、生きた文化財といえるかもしれません。

千住・足立の繁栄を物語る山車を、これから大切にしていきたいと思っています。

光茶釜と

二代目市山團十郎

関口崇史

享保二十年（一七三五）四月八日、歌舞伎役者二代名市川團十郎は俳句仲間とともに千住五丁目はずれの茶店に赴き、同店名物の光茶釜を見物している。その時に詠んだ俳句が句集『木饅頭』（きまんじゅう）に掲載されている。

時鳥影や茶釜のかな響 嵐々

垣はまはらのいほた卵の花 才牛

新しき嚙をけふも買に出て 訥子

于時享保二十年卯四月八日

「才牛」は團十郎の「訥子」（とつし）は歌舞伎役者初代沢村宗十郎の俳名である。彼らが見物した光茶釜は『江戸名所図会』（天保七・一八三六年）でも紹介され、現在は足立区有形民俗文化財であり、これまで「足立史談」でも紹介されている。團十郎らの俳句が載せられた『木饅頭』は寛政八年（一七九六）十月十二日、九十七才で亡くなった光茶釜の見物にも同行している雁字庵嵐々の句集で序によれば佐藤晩得によって寛政二年十一月（一七九〇）になされている。

同句集には、三人の俳句とともに

光茶釜と茶屋の主人に関する記述がある。その内容はこれまで知られてこなかった茶屋の主人の出自をはじめとする興味深い記事であるため紹介したい。

■光茶釜 句集『木饅頭』には、

千住五丁目のはづれに僅かの茶店あり。古き釜を幾とせの棕の灰を以て磨き入たれば、光尋常にかはり誠の白かねに等し。往來の者爰に休て銀の茶釜となむ云ふらし。自然と其名をも茶釜親父と呼ぶ。

とあり、茶釜が白銀のように光るのは「棕（むく）の灰」で磨いたからとしている。

棕木はニレ科（APG分類…アサ科）の落葉高木で、その葉は古来より木、竹、骨などの細工ものや、道具、建材などの研磨に用いられた（『日本大百科全書』小学館、『日本国語大辞典』小学館）。おそらく、棕の灰にも同様な効果があったのであろう。

■茶屋主人の素性 茶屋の主人の素性について、安永九年（一七八〇）に出版された大橋方長『武蔵演路』（『近世地誌史料集』足立区教育委員会）は「百姓半兵衛」とするが、『木饅頭』には、

此あるじが昔しを尋ぬるに、木挽町山村長太夫か座に勤めたる嵐喜代吉といふ女形のよし。右の在方保間木村（*保木間村か）大乘院



『江戸名所図会』 巻六 (天保7・1836年刊行)
光茶銚 (ひかりちやがま)

(意訳)

千住驛からわかれた道の左側に地元の人は耆老茶屋 (ぢぢがちゃや) とよぶ茶屋がある。むかしこの店の茶銚の光沢がことの外優れていたため、(将軍が) 御鑑賞された。そのため名物となりその名前も世の中で光かがやくことになった。

といふ真言宗の和尚、世話焼かれ
て此処へ住となん。

とあり、主人は元々木挽町 (東京都中央区銀座) 山村座 (座元山村長太夫) の女形の嵐喜代吉 (以降、茶屋の主人は「喜代吉」と表記) であつたという素性を紹介している。さらに、保木間村大乘院 (現、西保木間二丁目) の和尚の世話により当地に居を移したとしている。ただし、喜代吉と大乘院の和尚との関係は現時点では明らかでない。

百姓半兵衛 (『武蔵演路』) と歌舞伎役者嵐喜代吉 (『木饅頭』) と

いう異なる素性はどちらが正しいの
であろうか。結論から言えば、主人は元役者であつたと考える。なぜならば、喜代吉と團十郎は旧知の間柄の可能性が高いからである。

■團十郎と嵐喜代吉 二代目市川團十郎は、元禄元年 (一六八八) 十月十一日、父初代市川團十郎と母お成の長男として生まれた。幼名は九蔵、元禄十年 (二六九七)、中村座で初舞台を踏んだ。宝永元年 (一七〇四) 二月十九日、山村座出演中の父が楽屋にて役者生島半六 (生島新五郎門下) に刺殺されてしまう。父の

不慮を受けて、同年七月十五日、九蔵が二代目市川團十郎を襲名したのである。その襲名披露が行われたのが山村座であつた。また、彼の後見役は当時、山村座の座頭生島新五郎であつた。新五郎の庇護のもと團十郎は山村座で役者活動をしたのである。しかし、正徳四年 (二七二四) 三月、江島・生島事件により幕府の命により山村座は廃座されてしまう。

江島・生島事件は正徳四年 (一七一四) 正月十二日、月光院 (七代將軍徳川家継生母) 付きの江戸城大奥年寄江嶋らが、芝増上寺代参の帰途、山村座にて芝居を見物、その後、芝居茶屋に移動して、生島新五郎ら役者らと酒宴を続け、帰城が遅れた。この行動が問題視され、江嶋、新五郎らをはじめとする関係者が厳罰に処され、山村座も営業停止、廃座となったのである。事件後、二代目團十郎も二度の幕府の取り調べを受けたが、無罪となっている。

二代目襲名披露から約一〇年間、山村座で活動した二代目團十郎が同座で女形として活動した嵐喜代吉と面識があつても不思議ではないであろう。推測の域をでないが、喜代吉が千住に移り住んだのも、この事件による山村座廃座がきっかけだったのではないだろうか。以上のような関係から、主人の素性は『木饅頭』の記述の方が正しいと考える。

二人の俳諧仲間と連れ立って「日光街道、江戸迄も隠れなく関の東の名物也」(『木饅頭』) と評判の光茶釜を見物した享保二十年当時、二代目團十郎は大病を患い、舞台を長期間休んでいた。旧知の役者の茶店と知って訪ねたのか、突然の再会に旧交を懐かしんだのか、現存する二代目團十郎日記に当日の記録はなく(二世市川團十郎日記抄)、彼の気持ちを知る由はない。

*本稿で使用した『木饅頭』は、井上隆明編『佐藤朝四随筆集』(近世風俗研究会、一九八〇年)の同句集の解題で紹介された記事を使用しており、本文は未見である。

参考文献

大西常一「光茶釜」(『足立史談』五六号、一九七二年)
佐藤貴浩「はい、文化財係です14光茶釜」(『足立史談』六二〇号、二〇一九年)

田口章子『二代目市川團十郎』(ミネルヴァ書房、二〇〇五年)

ビュールク・トローヴェ『二代目市川團十郎の日記に見る享保期江戸歌舞伎』(文学通信、二〇一九年)

「二世市川團十郎日記抄」(立教大学近世文学研究会編『集資成料二世市川團十郎』和泉書院、一九八八年)

(足立区文化財調査員)